詩集

勘違い

山﨑　馨

大宮詩人叢書

山﨑　馨（やまざき　かおる）
1919年大宮市に生れる。日本ペンクラブ、
埼玉詩話会、大宮詩人会会員。第2次「時間」
の創刊より同人となる。
詩集「新樹」「午後の祝祭」「八目鰻」「詩人の記」
「日々の花」その他「読書雑記」の著書あり。
現住所　〒331 大宮市上小町209

山﨑 馨 詩集　**勘違い**　〈大宮詩人叢書第3期②〉

平成元年2月20日発行

著　者　山﨑　馨
発行者　宮澤章二
発行所　大宮詩人叢書刊行会
大宮市上小町209　（〒331）　山﨑方
電 話 048-641-2717　振替 東京2-139230
編集者　山﨑　馨・廣瀧　光
制　作　麗文社　大宮市三橋4-122-3
電 話 048-623-8417
印　刷　中沢印刷株式会社

定価1,000円

詩　集

勘　違　い

山﨑　馨

大宮詩人叢書〈第３期②〉

勘違い　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

こころの歌　8
釣堀りの鯉はマグロが好物　10
詩人の記　12
人生哀歌　14
男と女の　17
良寛　20
女の執念　23
花は私の　26
仏がかえる　28
十二月　30

水の幻覚　32
十三ヵ月で暮したい　34
理性　36
勘違い　38
ひみつ　41
生きることの　43
不吉な夢　45
記憶の中の少年　47
あとがき

勘違い

こころの歌

どんな人生であろうと
その一生というものは
終ってみなければわからない
幸福であったか不幸であったか
街にうずまくドラマのなかで
いずれも記憶はやつれて消える

人生なんて小さなドラマだ
時の流れにながされて
眼の届かぬ取引も
鏡に映る過程のなかで
こねてこねてこねまわすから

政治も思想も煙のなか

いまでは実態をなくしたこの世のなかに
隠蔽されたこの世のなかで
なにがあったかわからなくても
こころにつかんではなれない
真実だけでよいではないか

死する心境というものは
生存中はつかめない
すべては心構えにおいて存在するが
苦労話にすくわれながら
希望を抱く明日があるから
生きる力がわいてくる

一九六六・十一〈埼玉詩集〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

釣堀りの鯉はマグロが好物

今夜も寿司屋で
マグロをポケットにねじこみ
近くの釣堀りにでかけていった

きづかれないポーズで
ポケットのマグロを針につけ
糸をたれると
ぴくぴくと手応えがある
まったく驚ろくほどの入れ喰いだ

まだほろよいかげんで
何匹かの鯉を片手に

表にでると星がまたたき
まことにご機嫌でござる

しかも
詩にほど遠い情景のなかで
ビニール袋の鯉は
思わぬ不覚に
必死の力をふりしぼり
逃走をこころみているかのようだ

釣堀りの鯉はマグロが好物

一九六六・十一〈埼玉詩集〉

詩人の記

言葉を捜し求めて
気弱な詩人が歩いている

天も地も無風で
求める空間の呼吸だけが
詩人の心にはいりこんで
あたためているかのようだ

そもそも夜郎自大の気風はあっても
ドンキホーテになりきれず
自己形成に力みながら
耐えしのぶときもあった

またはかりしれない
葛藤を繰り返し
自然に涙の流れでるときもあった

かかる思いに追いこまれ
いっぷくしながら空を仰ぐと
自己陶酔の慰めだけが
脳裡にこびりついてはなれない

言葉を捜し求めて
気弱な詩人は
またしても行き止りの路地を
足を引き摺り歩きはじめる

一九七四・十〈埼玉詩集〉

人生哀歌

よわい五十を越すと
未来より過去に比重が重くなり
青春の思い出は
奇妙な感覚のなかで
甦ってくるものだ

それは持続するものでなく
寸断された合間に
いりみだれながら
はげしい刺戟をもたらすのだ

その断片のまなざしは

予想もつかないしぐさに終って
ふりだしにもどるのだが
忘れることのできない感触だけは
敏感な触手のなかで
こころよく結び合うのだ

いまは通りすぎたできごとが
胸の奥深く閉じこめられ
日記にもアルバムにも
残すことのできない
恥らいとなって
眠りつづけてしまうのか

あまりにも過去の多い
あまりにも未来の少ない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com